

Amis de Paris: Japanese Artists in Paris

「巴里が日本で想像する以上の絵画の自由さ、新らしい型に躊躇なく飛び付く思い切つた革命を目賭し、若い私は驚喜と希望との瞳を見張り、立ちどころに日本の美術学校で習得した印象派の作風を全部放棄する決心をしたものです。」

藤田嗣治（述）、柳澤健（著）『巴里の昼と夜』世界の日本社、1948年12月、11頁。

「やがて佐伯は非常に巧みに、野蕃な、美しい表現をした時、その最も優秀と私達が思つた勇敢な五十号の裸女を持つてオーヱ゛ルのヴラマンクの家を訪ねた。

実に驚くではないか、この強烈な佐伯の画に対してヴラマンクは——アカデミック——だと云つて、アカデミックの抗撃を一時間半もつゞけた。

—半分は佐伯自身の責任であらうが、半分は日本の美術学校の罪だ……と私は佐伯を弁護した。」

里見勝蔵「佐伯とヴラマンクと私」『美術新論』第3巻第10号、1928年10月、115頁。

「ロオト氏の諸作を通じて、先づその敏感性（サンシビリテ）が私の胸を打つた。そして此上もなく堅固な構成や、塊の律動的なアラベスクを見て、私はこれ迄朧ろ気ながらも追求してゐたものを、其のまゝのあたりに見る気がした。」

黒田重太郎「アンドレ・ロオト氏とロジエ・ビッシエール氏」『中央美術』第9巻第7号、1932年7月、15頁。

あみ・ど・ぱり　巴里の日本人芸術家たち

東京国立近代美術館のコレクションを中心に、戦前から戦後にかけてパリに渡って研鑽を積み、自身のスタイルを確立してサロン等で活躍した日本人芸術家たちを紹介します。

「あみ・ど・ぱり（パリの友人たち）」とは、パリに滞在経験のある芸術家、作家、実業家らが1930年に結成した社交団体、巴里会の機関誌のタイトルです。世界中のアーティストが芸術の都に集った1920年代、パリに暮らす日本人芸術家は200人を超えたと言います。しかし、第二次世界大戦の勃発により、ほとんどの芸術家は帰国の途につきます。やがて、戦後になると再び多くの芸術家がパリに赴き、活気を取り戻しつつあったパリの美術界に身を投じました。

本展では、藤田嗣治をはじめ、佐伯祐三や板倉鼎（かなえ）、岡本太郎らの作品を紹介するとともに、当時のパリでとりわけ人気を博した高野三三男（こうのみさお）と岡上梨雨（おかのうえりう）の作品をお借りして、特別に展示します。さらに、新収蔵の長谷川春子や毛利眞美をはじめ、パリで制作に励んだ女性のアーティストの作品にもご注目ください。

Primarily featuring works from the collection of the National Museum of Modern Art, Tokyo, this exhibition showcases Japanese artists who went to Paris in the years from before World War II into the postwar period. There they refined their craft, established original styles, and rose to prominence at the Salon and beyond.

"*Amis de Paris* (Friends of Paris)" was the title of the journal of Parikai, a social club formed in 1930 by artists, writers, and businesspeople who had lived in Paris. In the 1920s, when artists from around the world gathered in this capital of the arts, the Japanese artists living in Paris are said to have numbered more than 200. With the outbreak of World War II, however, most of them returned home. After the war, many artists once again went to Paris, immersing themselves in an art world that was recovering its vitality.

Alongside works by Fujita Tsuguharu and others such as Saeki Yuzo, Itakura Kanae, and Okamoto Taro, we present a special display of works, on loan, by Kono Misao and Okanoue Riu, two artists who were especially popular in the Paris of those years. We also invite you to turn your attention to works by women artists who pursued their art in Paris, among them recent acquisitions by Hasegawa Haruko and Mori Mami.

パリの街角で

第一次世界大戦終結後、「狂乱の時代」を迎えた華やかなパリの街に、多くの日本人芸術家が集います。彼らは、アカデミーに籍を置いて教えを受けたり、現地での個人的な繋がりから学んだりと、それぞれのスタイルで制作に励みました。とりわけ、1920年代の早い時期から渡仏した里見勝蔵や前田寛治、佐伯祐三らは、帰国後に「1930年協会」という団体を結成し、滞欧を経て培った新しい芸術表現を後進へ伝えたことでも知られます。

異国暮らしに奮闘する中で、彼らは目にふれた様々な情景を作品に描きました。佐伯祐三が没する前年に描いた下町情緒ただよう街並みや、妻の米子の静物画、また戦前と戦後の滞在を合わせると50年以上パリに住んだ荻須高徳によるモンマルトルの描写は、日本人がパリという場所に向けたまなざしをありありと浮かび上がらせます。日本人芸術家たちがパリの街角で過ごした日々を、作品を通してご覧ください。



前田寛治（1896–1930）《労働者》1925年頃



里見勝蔵（1895–1981）《静物》1926年



荻須高徳（1901–1986）《モンマルトル裏》1940年

フィンセント・ファン・ゴッホ晩年の主治医で、美術収集家としても知られるガシェ医師。その没後、邸宅にはファン・ゴッホに心酔する多くの日本人芸術家が訪れました。佐伯祐三・米子夫妻も息子のポールと面会し、ガシェ家のコレクションを目にしています。▼



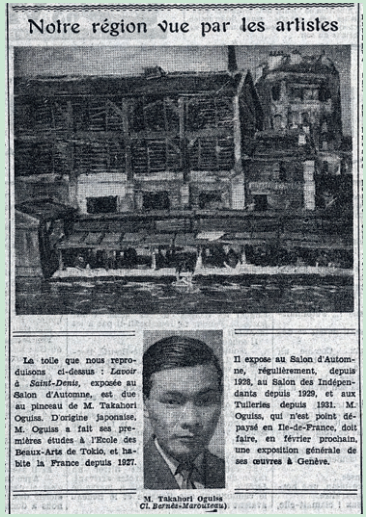
佐伯祐三（1898–1928）《ガス灯と広告》1927年



佐伯夫妻とポール・ガシェの写真（左から：佐伯祐三、米子、ポール・ガシェ）
出典：『中央美術』昭和3年10月号



佐伯米子（1903–1972）《シャルボン》1925–26年



Notre région vue par les artistes

La toile que nous reproduisons ci-dessus : *Lavoir à Saint-Denis*, exposée au Salon d'Automne, est due au pinceau de M. Takahori Oguiss. D'origine japonnise, M. Oguiss a fait ses premières études à l'École des Beaux-Arts de Tokio, et habite la France depuis 1927.

Il expose au Salon d'Automne, régulièrement, depuis 1928, au Salon des Indépendants depuis 1929, et aux Tuileries depuis 1931. M. Oguiss, qui n'est point dépaysé en Ile-de-France, doit faire, en février prochain, une exposition générale de ses œuvres à Genève.

M. Takahori Oguiss
Cl. Bernès-Marouteau.

"Notre région vue par les artistes,"
Le Petit Journal, December 24, 1933
Source: gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France

フランスでの荻須高徳の活躍は、現地のメディアでもしばしば取り上げられました。大衆紙「ル・プティ・ジュルナル」1933年12月24日号では、作品《サン=ドニの洗濯場》の図版やポートレートとともに、パリのサロンを中心に活動する日本人画家として紹介されています。▶

アントワーヌ・ブールデルの教室で

近代彫刻の父オーギュスト・ロダンの助手を務めた彫刻家アントワーヌ・ブールデルは、ロダンのもとから独立すると、制作の傍ら、パリの美術学校アカデミー・ドゥ・ラ・グランド・ショミエールで後進の育成にあたりました。入学試験が不要で、誰でも登録が可能だったグランド・ショミエールには、若い学生たちが集い、アルベルト・ジャコメッティやジェルメーヌ・リシエらがブールデルに学んでいます。

ロダン人気の高かった日本からも、多数の彫刻家が戦前のパリへ渡り、同校でブールデルの教室に在籍しました。1921年に渡仏した保田龍門を皮切りに、木内克や金子九平次など、のちに日本の近代彫刻史に名を刻む面々がブールデルの指導を受けています。彼らはヨーロッパでの日々を通して、西洋に深く根付いた彫刻芸術を学び、特に長く滞在した木内はやがてテラコッタ技法に習熟するなど、それぞれが新たな表現や素材を試みました。



金子九平次（1895–1968）《C嬢の像》1925年



木内克（1892–1977）《女の顔》1929年



保田龍門（1891–1965）《クリスティーヌの首》1923年頃

女性が洋画家になることが容易ではなかった戦前から戦後まもない時期において、女性が海外に渡って絵画を学ぶことに、大きな困難が伴ったことは想像に難くありません。単身で渡仏した長谷川春子や森田元子、毛利眞美は非常に稀なケースで、佐伯米子や岡上りう、南桂子のように、パートナーと欧州をめざす船に乗り込むことが多かったようです。彼女たちはパリでそれぞれの師を見つけ、サロンへの出品を果たし、個展を開くなど、精力的に活動しました。

本展には出品されませんが、1920年代から1930年代にかけてのサロン・ドートンヌの目録を見ると、帰国後も洋画家として活躍した東山紗智子や、夫である板倉鼎の手ほどきで絵を描きはじめた板倉須美子、薩摩治郎八の妻であった薩摩千代、岩崎弥太郎の孫娘として生まれ、外交官の夫とともにパリに滞在した澤田美喜ら、幾人かの日本人女性が出品していたことが分かります。



森田元子（1903–1969）《想い》1947年

長谷川春子（1895–1967）《笛を吹く男》1935年



E. C., “La peinture aux pierres précieuses,”
Le Journal, December 10, 1929

Source: gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France



La peinture aux pierres précieuses

Mlle Harouko Hasegawa est une jeune artiste japonaise fine, douce et frêle, qui ne vit en France que depuis quelques mois. Elle y vit hors des cénacles et des ateliers, jalouse de son indépendance. Mais elle vient de se manifester publiquement en organisant, près de l'église Saint-Germain-des-Prés, une exposition de ses œuvres.

Le grand intérêt que présente cette artiste est la délicate poésie qu'elle traduit. Lignes et couleurs composent un poème lyrique plus qu'une œuvre purement esthétique. Ceci ne veut pas dire que Mlle Harouko, qui a reçu de son

Mlle Harouko Hasegawa
(Photo S. Londynski.)

maître Kiyokata Kaburagui un solide enseignement traditionaliste, s'en tient aux cartes classiques et aux élégantes en kimono, cheveux laqués et éventail. Mlle Harouko puise son inspiration dans la vie moderne — ce qui pour une femme artiste japonaise est déjà fort rare et même assez critiqué. — Elle peint aussi bien une danseuse de tango qu'une rivière du Loiret, qu'une plage à la mode. Seulement elle s'attache surtout à dégager l'âme de ces choses et même leur élément fantaisiste sinon fantastique.

Quant à sa technique, elle est loin de manquer d'originalité. Mlle Harouko peint sur soie spéciale avec des couleurs non moins spéciales obtenues en broyant des pierres précieuses, comme des turquoises, par exemple.

Cette technique est d'ailleurs courante au Japon. Mais on ne l'emploie surtout que pour la décoration, car ces couleurs, fines comme du pollen et que l'on utilise avec de la gélatine, sèchent instantanément, rendant presque impossible les mélanges et les retouches. Il faut donc une certaine spontanéité d'exécution. Or, Mlle Harouko réalise avec ce matériel précieux des tableaux comme elle en peindrait avec de la peinture à l'huile. C'est une innovation qui, au Japon, n'a pas manqué de provoquer une certaine stupéfaction puis de l'admiration.

De prime abord cela rappelle un peu la matité et la finesse de la gouache. Puis on remarque une plus grande subtilité de tons, une délicatesse de vapeurs colorées, une légèreté de brumes printanières. La grâce féminine ne pouvait trouver meilleure interprète que cette poudre précieuse comme celle des papillons et qui, au surplus, jamais ne s'altère et défie les siècles.

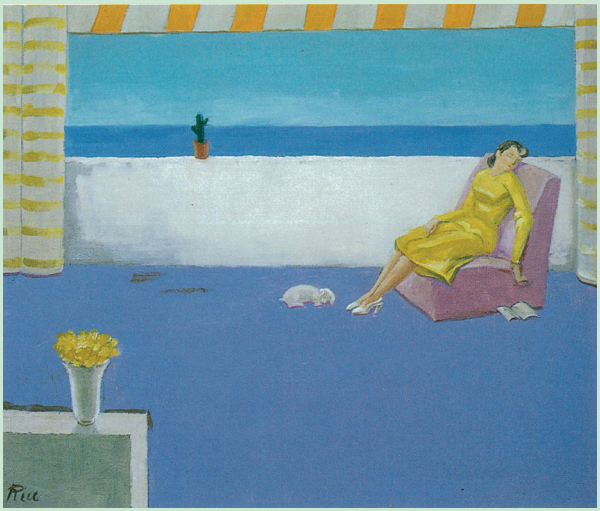
Par malheur, cela fera la joie des amateurs de calembours, qui seront évidemment tentés de dire que Mlle Harouko est assurée de faire des tableaux de valeur. — *E. C.*

長谷川春子がサン＝ジェルマン＝デ＝プレ教会の近くで開いた展覧会のレビューと作家のポートレート。長谷川が現代生活からインスピレーションを得ていること、その表現にみられる繊細な詩情と奇想天外さ、技法の独創性が称賛されています。 ▲



岡上りう（1896–1969）《ダーリア》1924–1931年頃

岡上りう《うたたね》1924–1931年頃



フランスの雑誌『ファンタジオ』に掲載された岡上りうの作品《戯れの恋》。『ファンタジオ』は演劇や文学の話題を中心に、政治や社会についても取り上げた雑誌で、多くの画家やイラストレーターを起用しました。岡野りうは、いくつかの雑誌に挿絵を寄せたほか、1920年代後半から1930年代初頭の数多くの雑誌に展示のレビューが掲載されるなど、当時のパリでとりわけ活躍した日本人の画家だったことがうかがえます。▼

Riu Okanouyé, “Flirt,” *Fantasio*, June 16, 1933

Source: gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France



パリの個性派たち

ここでは、それぞれのスタイルを確立して、パリの画壇や社交界で成功を収めた画家や、前衛的な表現や美術運動に身を投じた画家を中心に、パリで活躍した個性派たちの作品を紹介します。

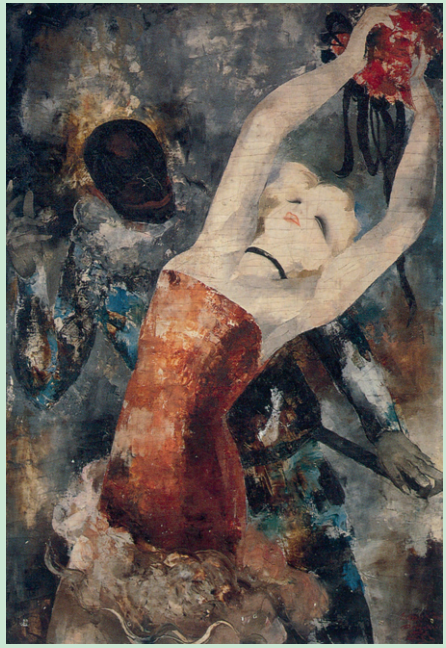
藤田嗣治は、1923年のサロン・ドートンヌに出品した《五人の裸婦》が注目され、一躍パリ画壇の寵児になります。高野三三男と岡上梨奈の夫婦も、同じくサロンで活躍し、社交界でも人気を博しました。銅版画のマニエール・ノワールという技法を復活させ、確固たる地位を築いた長谷川潔。板倉鼎は、明るい色彩と堅固な構成のスタイルを確立し、サロンへの入選を重ねるも、志半ばで夭折します。東郷青児は、未来派に傾倒したのち、キュビスムの作風へと移行しました。坂田一男は、フェルナン・レジェに学び、キュビスムを基本としながら抽象絵画を追求します。そして、父の仕事の関係で若くして渡仏した岡本太郎は、ピカソの作品に衝撃を受け、ジャン・アルプの誘いでアプストラクシオン・クレアシオンのグループに参加して、有機的なフォルムを特徴とする作品を残しました。

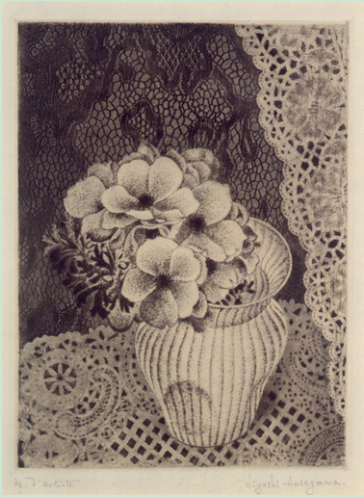


藤田嗣治（1886–1968）《五人の裸婦》1923年

© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2026 G4416

高野三三男（1900–1979）《掛合い》1931年





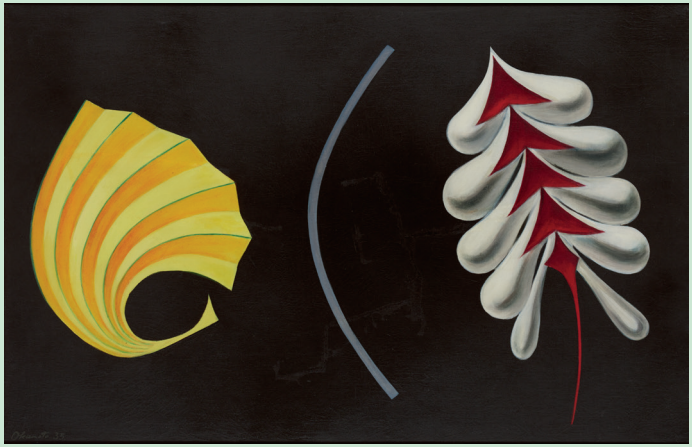
長谷川潔（1891–1980）《小さなアネモネ》1939年



板倉鼎（1901–1929）《休む赤衣の女》1929年



坂田一男（1889–1956）《コンポジション》1948年



岡本太郎（1911–1996）《コントルポアン》1935/54年



東郷青児（1897–1978）《サルタンバンク》1926年

©Sompo Museum of Art, 26036

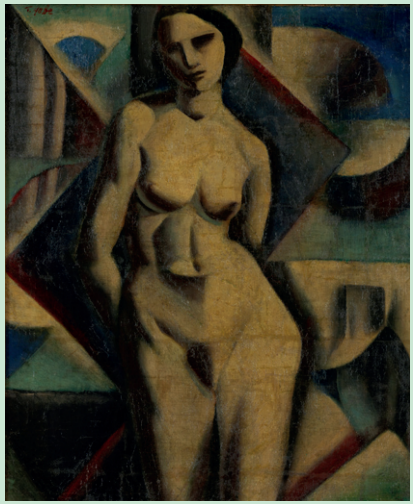
アンドレ・ロートと日本の教え子たち

アンドレ・ロートは、はじめキュビスムの画家として出発した人物で、フランス美術の伝統に連なるキュビスムの位置付けを論じるなど、理論家としても知られました。1920年代初頭、モンパルナス駅のほど近くでアカデミー・アンドレ・ロートを創設すると、自ら教壇に立って指導にあたります。彼のもとには、タマラ・ド・レンピッカやルイーズ・ブルジョワ、若き日の写真家アンリ・カルティエ＝ブレッソン、さらに歌手・俳優として知られるセルジュ・ゲンズブールなど多様な面々が集い、賑やかなアカデミーはロートが没する1962年まで続けられました。

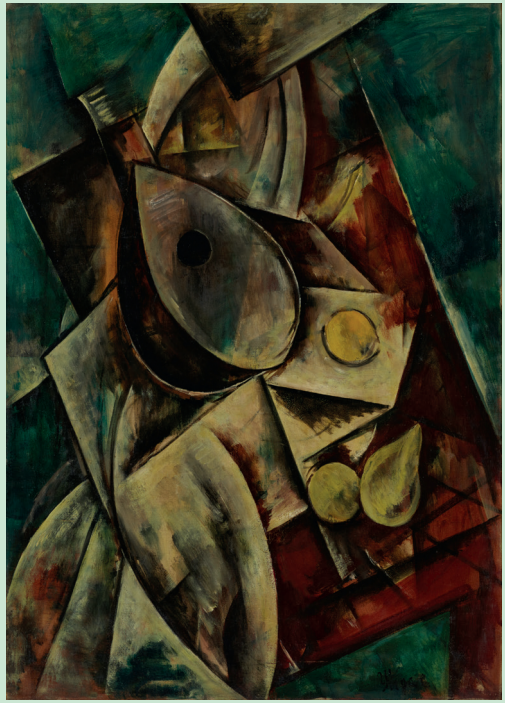
特に、ロートに学んだ芸術家の中に多くの日本人がいたことは注目されます。戦前にパリへ渡った黒田重太郎と川口軌外、また戦後初の女性留学生となった毛利眞美が、それぞれロートのアカデミーで研鑽を積んだほか、矢部友衛もロートに私淑した一人でした。一時は二科会の在外会員となるなど、ロートは日本の近代美術史に大きな足跡を残したフランス人芸術家でした。ここでは、指導者ロートを取り巻く日本人画家の作品を中心にご紹介します。

黒田重太郎（1887–1970）《港の女》1922年





矢部友衛（1892–1981）《裸婦》1920年



川口軌外（1892–1966）《静物（マンドリン）》1927–31年

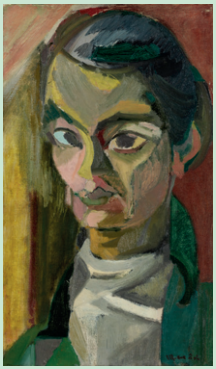
毛利眞美と戦後のパリ

1920年代から1930年代にかけて渡仏し、パリ画壇の一員として活躍した芸術家たちは、第二次世界大戦の勃発により、帰国を余儀なくされます。およそ10年間の中断を経て、芸術家たちが再びパリをめざしたのは1950年代に入ってからでした。

1950年にいち早く渡仏し、アンドレ・ロートの画塾で学んだ毛利眞美は、やがて筆触の際立つ抽象的な画風へと向かいます。毛利とパリで結婚した堂本尚郎は、アンフォルメルの画家として活躍。1953年末にフランスに向けて出発した柳原義達は、戦後のパリの彫刻から大きな刺激を受け、日本近代のアカデミックな彫刻の先を目指しました。柳原と同じ船に乗っていた版画家の浜口陽三と南桂子の夫婦は、それぞれカラーメゾチントとエッチングに取り組み、銅版画による詩情あふれる世界を作り上げます。そして、1953年にパリに渡り、1987年に没するまでフランスで活動した木村忠太は、パリや南仏の風景を、重層的な色彩で描き続けました。



毛利眞美《裸婦(B)》1957年



毛利眞美 (1926–2022)
《自画像》1952年頃

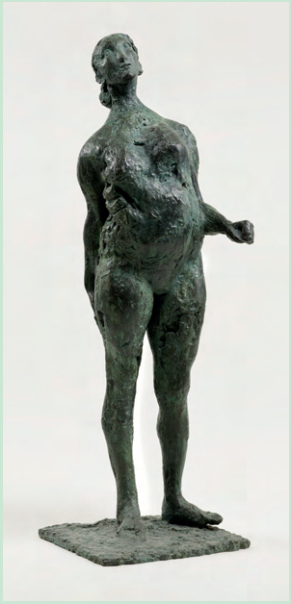


毛利眞美［無題］1950–55年頃



毛利眞美［無題］1960年代

柳原義達 (1910–2004)《犬の唄》1961年

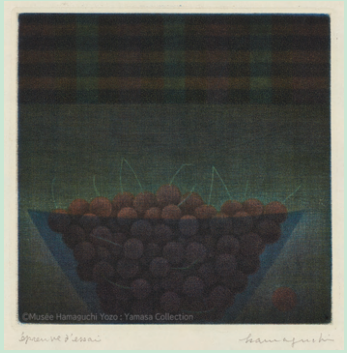




木村忠太 (1917–1987)《ベニス(A)》1965年



堂本尚郎 (1928–2013)《作品 60-2》1960年



浜口陽三 (1909–2000)《青いガラス》1957年



南桂子 (1911–2004)《モンスリー公園》1956年

高野耀子氏のインタビュー

インタヴュアー：横山由季子、由良茉委
2026年5月27日、高野耀子氏のご自宅にて

高野三三男と岡上（高野）りうの長女である、ピアニストの高野耀子氏に、幼少期を過ごしたパリでの思い出や、藤田嗣治をはじめとする画家たちとの交流、ご両親の逸話についてお話を伺った。

横山　耀子さんは1931年に生まれ、画家であるご両親とともに、8歳までパリで生活されていましたが、まずはパリでの暮らしについてお伺いできますか。

高野　モンマルトルの北、リュ・オードネールの建物に住んでいました（※1933年に建設されたシテ・モンマルトル・オ・ザルティスト）。芸術家のための家で、2階がテラスみたいになってるのね。通りを挟んだアパルトマンの上の方の階に藤田さんが住んでたの。

由良　建物は今もあるんですね。

高野　何年か前に行ってみたけど、見た目は同じです。ヨーロッパだと一度建てたらなかなか壊さないでしょ。

横山　芸術家の方がたくさん住んでいたと思いますが、他にはどんな方が？

高野　ええ、だって芸術家のための家賃が安い建物でしたからね。荻須さんもここに住んでいたんです。荻須さんは4階だったかな。

横山　荻須高徳さんとも交流があったのですか。

高野　そう、どこかへ行くとお土産なんか買ってきてくれたりしてね。

横山　藤田嗣治さんはどんな方だったのでしょう。

高野　藤田さんって、当時としては珍しいぐらい、自分を演出するのが上手だったわけよね。その時代に合わせて、自分を目立たせて。うちの父がある時、人の名前を覚えられなくて困ってるって言ったら、藤田さんが「そんなものくだらない、人がお前の名前を覚えるようにしろ」って言ったんですよ。「お前が人の名前を覚えることなんか心配するな」って。なんだか、すごく特徴的な言葉じゃない？

横山　本当ですね。高野さんがお会いになった時は、おかっぱ頭に丸眼鏡、口ひげのスタイルでしたか。

高野　そうね。藤田のポートレートを撮ったリプニツキって、有名な写真家いるでしょ。あのコクトーの写真なんかも写してる人。私ある時パリでこの人に声をかけられたのよ。写真を撮りたい、なんて言われちゃってね。私が18歳ぐらいの時。それでこの人ね、ヴァイオリンを弾くから、ピアノを習ってる私に、誰かのソナタを一緒に弾こうと言って、楽譜渡されてね。でも私は試験で忙しくて、それどころじゃないわけよ。付き合えば面白かったわね。

横山　耀子さんが戦後まもない時期にパリのコンセルヴァトワールに留学していた時ですね。藤田さんはファッションも奇抜でしたか。

高野　普段はそうでもないけど、仮装舞踏会とか、そんな時にはミシンを使ってご自分で作られていましたね。藤田さんのミシンは後ろに向かって縫える珍しいモデルだったから、子供ながらに感心してたの。

横山　よく藤田さんのお家に遊びに行っていたのでしょうか。

高野　いえ、藤田さんがこちらの家によく来てましたね。

由良　藤田さんが絵を描いているところは見たことありますか。

高野　ないけれど、こんな遊びしましたね。大きな紙をじゃばら状に畳んで、最初の人が顔を書くのね。それを折って、次の人が上半身を書いてね。それから下半身をみんなでバラバラに書いていくの。前の人が描いたところを見てないから、結果的にすごくおかしなことになるわけよね。荻須さんのところでもやったかな。それで藤田さんってば、おトイレに腰掛けてるような下半身なんかを描くから、おかしかった。

横山　岡本太郎さんとも交流があったと伺いました。

高野　大使館で集まったり、そういえば家にも来たことがある。朝日新聞の記者の人がね、岡本さんに「お前、30にもなってうろうろしてて、恥ずかしくないのか」って聞いたら、「俺はまず30でない」って言うの。じゃいくつだって聞くと、「29だ」って。

由良　日本人芸術家のパトロンだった薩摩治郎八さんとも親しくされていたとか。

高野　そうですね。たしか私が3歳の夏、薩摩さんが南フランスに借りていた別荘でひと夏過ごした思い出があります。地中海の方ね。子供だからよく覚えてないけど、初めて海を見てね。うわーって飛び込んじゃったのよ。大喜びで。

由良　ご両親がパリに渡るときに一緒だった岡田謙三さんとは、何か印象深い思い出はありますか。

高野　戦時中に、疎開先の宮城県で一緒でしたね。動物が好きで、疎開してる時はカナリアかなにかを飼っていたかな。

横山　疎開先でも皆さん絵を描いていたんですよね。

高野　そうですね。でも当時、岡田さんはまだ抽象画ではなかったですね。

横山　ご自宅には有島生馬さんゆかりの品もありますが、パリに来た時に交流があったのでしょうか。

高野　そうそう。それで、いつもそうなんだけど、お人形かな？と思うと、有島さんは私に本を持ってきたのよね。薩摩さんの方は小さいタンスをくれたり、なんだ、人形じゃないんだって。小さい時は、人形の方が興味あるものね。

横山　ご両親についても伺いたいのですが、お二人が生きてらした時から、ご自宅に絵を飾っていたのでしょうか。

高野　いいえ、まったく。母が亡くなった時なんて、大変でしたよ。物が捨てられない人だったから。

横山　りうさんは、自分の作品について話したりはしていましたか。

高野　全然なかったですね。自分が絵を描いていたなんていうことは、一言も言わなかったです。今から考えるとすごく大胆な生き方をしてたのに、すごくきちんとしていて。手紙や年賀状を書くとか、お金の計算だとかね。

横山　日本に戻られてからは、制作はされなかったんですよね。

高野　パリにいたとき、私が生まれてから描かなくなりましたね。日本に帰ると、戦争で物がなくなって、ずっと畑仕事をしていました。戦時中は大変でしたね。

由良　耀子さんがりうさんの作品を初めて見たのはいつだったか覚えていますか。

高野　覚えていません。でもね、母になぜ絵を描かないのかって質問したことがあるけど、母はひとつの家に、画家が2人いてはいけないと考えていたみたいね。やっぱり父が何よりも大事だったんじゃないかしら。

由良　お二人は、仲がよろしかったんですか。

高野　喧嘩とか、意見が合わないで言い合いするとか、一度も見たことないですね。でもね、父は、母が亡くなった途端、お金をのびのび使えるようになったわけ。それまで全部母がコントロールしていましたからね。そしたらまあ、よく使ったみたいで、死ぬ時3000円しか残ってなかった。

由良　たったそれだけ…！何に使われていたんでしょうか。

高野　銀座の素敵なお店でいい背広を買ったり、いいレストランでご飯を食べたり、ハイヤーに乗ったり。手紙だとか税金だとか、母が事務的な事を何でもやっちゃうから、父は絵ばっかりを描いていられたけれど、やっぱり何か我慢していたところがあったんじゃないかな。母の方からしても、絵を辞めちゃって、かなり無理してたんでしょうね。

横山　耀子さんがピアノを始めて、続けていくことは応援されていたんですよね。

高野　自分がやりたいことやらなかった、っていうのがあったんじゃないかな。でも大変だったと思いますね。私が6歳から8歳ぐらいの間は、母親がそばに座ってないと、絶対練習しなかったの。音楽は好きだけど、毎日4時間とか5時間とか練習するのはね、小さい子としては苦痛なわけ。だって遊びたいでしょう。それで、母が他のことをしてたら、私はまったく弾こうとしなかった。近くにいて、本を読んでいてもだめ。母がちゃんと聞いてなきゃ、弾こうとしなかったの。

横山　それはまだパリにいらした時ですか。

高野　そうそう。日本に来たら、それどころじゃない時代だからね。

由良　耀子さんは絵も描かれたのでしょうか。

高野　デッサンなんかは上手かったみたいだけど、私が15歳くらいの時に、母から、「音楽家と美術家のどちらにもなれるけど、絵は歳をとってからでも始められるから、若いうちはまず音楽をやったら」と言われて、結局音楽の方に進みましたね。

横山　耀子さんはピアノの道に進まれましたが、三三男さんも楽器を弾けたと聞きました。

高野　そうそう。祖父がうちの父に、ヴァイオリンを一生懸命やってるけど、ヴァイオリン弾きになるつもりかって聞いたんだそうです。でも父は、とんでもないって言ったらしいの。演奏家には本番というものがあって、本番には何が起こるかわからないけど、絵描きだったらそんなことはない、だから自分は絵描きになるんだ、って。父は最初は海賊になろうと思って、商船学校に入ったのよ。だけど、海賊が現実にはいないって、学校にいる間に気づいたの。船が世界一周する前に辞めて、それで美術学校へ行ったわけ。だから数学とか、星のことにすごく詳しかったんですよ。そういえば、フランスから日本へ帰る伏見丸の中でね、空の星を見ていた父が急に「あれっ、船が逆さの方向に進んでる」って言ったの。それで船長室へ行ったら、なんと機械が壊れていた。父は星を見て分かったのね。あの時気が付かなかったら、またマルセイユへ戻るところだった。

横山　すごいエピソードですね。りうさんも多才な方でしたか。

高野　母はすごく勉強が好きで、出来も良かったみたい。だからフランスに行った時も、絵を描くだけじゃなくて、フランス語の学校に行ったりして。戦後も、フランスに行きたいっていう人にちゃんとフランス語を教えられるぐらい、実力があった。父とフランスへ行く前にもヨーロッパに行っていたから、滞欧期間は合計すると20年近いんじゃないかな。父は絵を描くばっかりだったけど、母は買い物に行ったり、フランス語を使っていたわけね。それに私は小さい時はフランス語しか喋らなくて、戦争がなかったら両親は日本に帰る計画もなかったらしいから、私に日本語を教えずに、フランス人として育てていたんですよ。家の中でも私とはフランス語で会話して、親同士は多分日本語だったんじゃないのかな。

横山　戦争がなかったら、ご家族でずっとパリで暮らしていたかもしれないんですね。今日は貴重なお話をありがとうございました。

出品リスト

Chapter 1

前田寛治
Maeta Kanji
労働者 / Labourer
c. 1925
油彩・キャンバス / oil on canvas
65.0×53.3 cm

里見勝蔵
Satomi Katsuzo
静物 / Still Life
1926
油彩・キャンバス / oil on canvas
73.0×92.0 cm

荻須高徳
Ogisu Takanori
モンマルトル裏 / Back Street of Montmartre
1940
油彩・キャンバス / oil on canvas
72.0×90.0 cm

佐伯祐三
Saeki Yuzo
ガス灯と広告 / Gas Lamp and Advertisements
1927
油彩・キャンバス / oil on canvas
65.0×100.0 cm

佐伯米子
Saeki Yoneko
シャルボン / Charcoal
1925–26
油彩・キャンバス / oil on canvas
50.0×60.5 cm

Chapter 2

保田龍門
Yasuda Ryumon
クリスティーヌの首 / Head of Christine
c. 1923
ブロンズ / bronze
34.0×28.0×29.0 cm

金子九平次
Kaneko Kuheiji
C嬢の像 / Portrait of Miss C
1925
ブロンズ / bronze
33.0×22.0×24.0 cm

木内克
Kinouchi Yoshi
女の顔 / Head of a Woman
1929
テラコッタ / terra cotta
39.5×27.0×41.5 cm

Chapter 3

長谷川春子
Hasegawa Haruko
笛を吹く男 / Piper
1935
油彩・キャンバス / oil on canvas
45.5×25.8 cm

森田元子
Morita Motoko
想い / Thinking
1947
油彩・キャンバス / oil on canvas
99.0×79.5 cm

岡上りう
Okanoue Riu
ダーリア / Dahlia
c. 1924–31
油彩・キャンバス / oil on canvas
91.5×73.0 cm
個人蔵 / Private Collection

岡上りう
Okanoue Riu
うたたね / Sleep
c. 1924–31
油彩・キャンバス / oil on canvas
38.0×45.5 cm
個人蔵 / Private Collection

Chapter 4

高野三三男
Kono Misao
掛合い / Duo
1931
油彩・キャンバス / oil on canvas
116.0×81.1 cm
個人蔵 / Private Collection

藤田嗣治
Fujita Tsuguharu
五人の裸婦 / Five Nudes
1923
油彩・キャンバス / oil on canvas
169.0×200.0 cm

板倉鼎
Itakura Kanae
休む赤衣の女 / Reclining Woman in Red Dress
1929
油彩・キャンバス / oil on canvas
110.3×142.0 cm
個人蔵(寄託) / Private Collection (Long term loan)

東郷青児
Togo Seiji
サルタンバンク / Street Performers
1926
油彩・キャンバス / oil on canvas
114.0×72.5 cm

長谷川潔
Hasegawa Kiyoshi
花(レースをバックにした花瓶の三つのアネモネ) / Flowers (Three Anemones in the Vase against the Back of Lace Curtain)
1937
銅版 / mezzotint
25.4×19.9 cm

長谷川潔
Hasegawa Kiyoshi
小さなアネモネ / Small Anemones
1939
銅版 / aquatint and soft ground etching
18.6×14.0 cm

坂田一男
Sakata Kazuo
コンポジション / Composition
1948
油彩・キャンバス / oil on canvas
53.0×41.0 cm

岡本太郎
Okamoto Taro
コントルポアン / Counterpoint
1935/54
油彩・キャンバス / oil on canvas
97.5×145.0 cm

Chapter 5

矢部友衛
Yabe Tomoe
裸婦 / Nude
1920
油彩・キャンバス / oil on canvas
65.0×53.2 cm

黒田重太郎
Kuroda Jutaro
港の女 / Women of the Harbour
1922
油彩・キャンバス / oil on canvas
66.5×82.0 cm

川口軌外
Kawaguchi Kigai
静物(マンドリン) / Still Life, Mandolin
1927–31
油彩・キャンバス / oil on canvas
116.6×81.5 cm

Chapter 6

毛利眞美
Mori Mami
自画像 / Self-Portrait
c. 1952
油彩・キャンバス / oil on canvas
46.3×27.2 cm
個人蔵(寄託) / Private Collection (Long term loan)

毛利眞美
Mori Mami
[無題] / [Untitled]
c. 1950–55
油彩・キャンバス / oil on canvas
116.5×91.0 cm

毛利眞美
Mori Mami
裸婦(B) / Nude (B)
1957
油彩・キャンバス / oil on canvas
130.0×89.0 cm

毛利眞美
Mori Mami
[無題] / [Untitled]
1960s
油彩・キャンバス / oil on canvas
100.0×82.0 cm
個人蔵(寄託) / Private Collection (Long term loan)

柳原義達
Yanagihara Yoshitatsu
犬の唄 / Song of the Dog
1961
ブロンズ / bronze
158.5×54.0×60.0 cm

堂本尚郎
Domoto Hisao
作品 60-2 / Work 60-2
1960
油彩・キャンバス / oil on canvas
162.0×130.0 cm

木村忠太
Kimura Chuta
ベニス(A) / Venice (A)
1965
油彩・キャンバス / oil on canvas
114.0×146.5 cm

浜口陽三
Hamaguchi Yozo
パリの屋根 / Roofs of Paris
1956
銅版 / mezzotint
18.4×18.5 cm

浜口陽三
Hamaguchi Yozo
クローバーの実 / Clover Seeds
1957
銅版 / mezzotint
29.3×29.5 cm

浜口陽三
Hamaguchi Yozo
青いガラス / Blue Glass
1957
銅版 / mezzotint
11.5×11.5 cm

浜口陽三
Hamaguchi Yozo
水差しとぶどうとレモン / Pitcher, Grapes and Lemon
1957
銅版 / mezzotint
29.4×34.4 cm

南桂子
Minami Keiko
モンスリー公園 / Montsouris Park
1956
銅版 / etching
29.2×29.1 cm
※カタログ・レゾネ掲載の作品名は《公園》

南桂子
Minami Keiko
庭園 / Garden
1956
銅版 / etching
29.0×29.0 cm

南桂子
Minami Keiko
羊飼いの少女 / Young Shepherdess
1957
銅版 / etching
29.0×29.0 cm

南桂子
Minami Keiko
雨の中の二人の女の子 / Two Girls in the Rain
1964
銅版 / etching
35.0×27.3 cm

藤田嗣治
Fujita Tsuguharu
高野三三男に宛てた絵手紙 / Illustrated letter addresses to Kono Misao
c. 1939–1940
インク、水彩・紙 / ink and watercolor on paper
26.1×19.0 cm
個人蔵 / Private Collection

藤田嗣治
Fujita Tsuguharu
高野三三男の似顔絵 「伏見丸」にて / Portrait of Kono Misao, aboard the Fushimimaru
1940
インク・紙 / ink on paper
27.3×17.5 cm
個人蔵 / Private Collection

藤田嗣治
Fujita Tsuguharu
高野三三男に宛てた絵手紙 / Illustrated letter addresses to Kono Misao
c. 1939–1940
インク、水彩・紙 / ink and watercolor on paper
20.3×27.4 cm
個人蔵 / Private Collection

高野三三男
Kono Misao
藤田嗣治の似顔絵「伏見丸」にて / Portrait of Fujita Tsuguharu aboard the Fushimimaru
1940
鉛筆・紙 / pencil on paper
16.0×23.0 cm
個人蔵 / Private Collection

ランブイエでのピクニック / Picnic in Rambouillet
1939
写真 / photo
9.0×13.4 cm
個人蔵 / Private Collection

ランブイエでのピクニック / Picnic in Rambouillet
1939
写真 / photo
8.7×13.0 cm
個人蔵 / Private Collection

伏見丸にて / On board the Fushimimaru
1939
写真 / photo
23.3×16.6 cm
個人蔵 / Private Collection

伏見丸にて / On board the Fushimimaru
1939
写真 / photo
23.3×16.6 cm
個人蔵 / Private Collection

Others

所蔵表記のない作品は、すべて東京国立近代美術館所蔵
Unless otherwise noted, all works are in the collection of the National Museum of Modern Art, Tokyo.

佐伯米子（p. 4）については、著作権継承者の連絡先が不明のため、掲載許諾が取れておりません。情報をお持ちの方は、東京国立近代美術館までご連絡ください。

コレクションによる小企画
あみ・と・ぱり
巴里の日本人芸術家たち

2026年9月29日（火）–
2027年1月11日（月・祝）
東京国立近代美術館
ギャラリー 4

MOMAT Collection Focus
Amis de Paris:
Japanese Artists in Paris

September 29, 2026 –
January 11, 2027
The National Museum of Modern Art, Tokyo
Gallery 4

企画・編集・執筆
横山由季子、由良茉委
（東京国立近代美術館）

Curator and Editor:
Yokoyama Yukiko, Yura Mai
(The National Museum of Modern Art, Tokyo)

翻訳
クリストファー・スティヴンズ

Translation:
Christopher Stevens

撮影
上野則宏（p. 7下）、
大谷一郎（p. 6, 20上）

Photographer:
Ueno Norihiro (p. 7 below),
Otani Ichiro (p. 6, 20 above)

デザイン
サリーン・チェン

Design:
Sarene Chan

印刷
株式会社レーエ

Printed by:
re-e co., ltd.

発行
東京国立近代美術館
〒102-8322
東京都千代田区北の丸公園3-1

Published by:
The National Museum of Modern Art, Tokyo
3-1 Kitanomaru-Koen, Chiyoda-ku, Tokyo
102-8322

©2026 東京国立近代美術館

©2026 The National Museum of Modern Art, Tokyo

MOMAT支援サークル

株式会社 木下グループ
ラグジュアリーカード
株式会社三井住友銀行
ブルームバーグ L.P.
三井住友カード株式会社
三菱商事株式会社
大日本印刷株式会社
株式会社アバントグループ
株式會社オオバ
丸沼芸術の森
アメリカン・インターナショナル・グループ・インク

MOMAT Corporate Partnership

Kinoshita Group Co., Ltd.
LUXURY CARD
Sumitomo Mitsui Banking Corporation
Bloomberg L.P.
Sumitomo Mitsui Card Company, Limited
Mitsubishi Corporation
Dai Nippon Printing Co., Ltd. (DNP)
AVANT Group
OHBA&CO.
Marunuma Art Park
American International Group, Inc.

表紙：毛利眞美［無題］1950–1955年頃



東京国立近代美術館